

幼稚園の4歳児クラスにおける環境構成と保育者の援助のあり方

－新入児と進級児の環境移行に着目して－

横山真貴子

(奈良教育大学 幼年教育教室)

長谷川かおり・竹内範子

(奈良教育大学附属幼稚園)

堀越紀香

(奈良教育大学 幼年教育教室)

Formation of Environment and the Kindergarten Teacher's Support for a 4-year-old children's class

幼稚園の4歳児クラスにおける環境構成と保育者の援助のあり方

－新入児と進級児の環境移行に着目して－

横山真貴子

(奈良教育大学 幼年教育教室)

長谷川かおり・竹内範子

(奈良教育大学附属幼稚園)

堀越紀香

(奈良教育大学 幼年教育教室)

Formation of Environment and the Kindergarten Teacher's Support for a 4-year-old children's class

Makiko YOKOYAMA

(Department of Early Childhood Education, Nara University of Education)

Kaori HASEGAWA・Noriko TAKEUCHI

(Kindergarten attached to Nara University of Education)

Norika HORIKOSHI

(Department of Early Childhood Education, Nara University of Education)

要旨：幼稚園の3歳から4歳の進級時における環境移行への適応を、それを支える保育者の役割の観点から検討した。教育課程・指導計画、及び保育観察の分析結果から、保育者が行っている移行を支える重要な援助を以下の3点、指摘した。第1に、保育者は子どもたちの「居場所を確保」した上で、「遊び」を通して「心理的居場所」ともいえる「友達」との関係を築こうとしていた。第2に、その際、新入児にはより「居場所の確保」に重点を置く援助が行われ、進級児には「人（3歳児クラスの友達）」との関係を基盤に「友達（新入児）」関係を広げていく援助が重視されていた。第3に、保育者は、子どもたちのなかに入って一緒に遊びながら、言葉でつなぐ援助を行っていた。

キー・ワード：幼稚園 kindergarten, 環境移行 transition period, 環境構成 formation of environment, 援助 support, 4歳児 4-year-old children,

1. 問題

1. 1. 移行期への着目

今、子どもの「移行期」が注目されている。家庭から保育所・幼稚園への入園、保育所・幼稚園から小学校への入学、さらには小学校から中学校への進学など、子ども時代には、新たな環境への適応が迫られる移行期がいくつかある。こうした移行期でのつまづきが、小1プロブレム、中1ギャップなど、社会現象として問題にもなっている。

折しも幼児期の教育から小学校教育への移行に関して、平成22年11月に「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」（幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究教協力者会議）が文部科学省から出された。この報告では、①幼児期の教育と小学校教育の関係を「連続性・

一貫性」で捉える考え方、②幼児期と児童期の教育活動をつなぐ工夫、③幼小接続の取り組みを進めるための方策（連携・接続の体制づくり等）の3点が示されている。幼児期の教育と小学校教育をなめらかにつなぐために、両者のつながりを理解するための道筋を明らかにし、保育・教育現場が取り組むべきことをより具体的に打ち出しといえる。

しかし、保育・教育の現場において具体的な取り組みが重要なのは、幼児期の教育から小学校教育への移行だけではない。子どもたちが新たな環境に適応していくためには、それぞれの移行期において、保育・教育現場での支援が不可欠である。

1. 2. はじめての移行期：家庭から園へ

子どもが最初に体験する環境移行は、家庭から初めて離れ、集団生活をはじめめる保育所・幼稚園への入園

であろう（岡本・菅野・塚田・城,2004）。特に一斉に集団保育を開始する幼稚園の3歳新入園時では、大半の子どもたちが大きな環境移行を体験する。これまでに出会ったことのないほど多くの同年代の子どもと一度に出会い、家族とは異なる大人である保育者に世話をしてもらうことになる。しかも保育者は、家族のように自分ひとりの世話をしてくれるわけではない。また、園には家庭とは異なる特定の生活習慣や日課もある。こうした集団の一員としての園生活のはじまりは、子どもにとって、戸惑いや不安、混乱に満ちたストレスの多いものに違いない。そして、それは子どもだけではなく、親にもあてはまる（福田,1992;今井,2006）。

このように困難に満ちた入園期の移行を、子どもたちはどのように乗り越えていくのであろうか。福田ら（1980）によると、4歳4カ月の女儿の場合、幼稚園入園後約2週間ほどで、物理的環境（保育室や遊具など）や園での基本的な生活習慣（あいさつ、朝の身支度など）には適応していったが、友達との直接的な関係や友達がいるなかでの保育者との関係など、対人的環境への適応は時間を要したという。大人との関係とは異なり、同年代の子ども同士の関係は互いによく合うことも多い。こう考えると、対人的環境面での変化への適応は、容易ではないのだろう。

幼稚園に入園した子どもの対人関係に着目した研究では、安定した友達関係や仲良し関係、親友関係は、入園後1カ月半から3カ月の間に形成され、親密な親友関係は10月まで持続する（謝,1999）ことが明らかにされている。具体的な友達とのかかわり方については、3歳児は仲間と相互作用を開始する際、模倣や一緒にいることが多いが、次第に相手の活動への参加や暗黙的な方略が増加していく（松井・無藤・門田,2001）こと、子ども同士のつながりの形成には段階が見られ、他者との同調的な動きから一方的につながりを求める時期、相互のつながりを楽しむ時期、つながりの変容を経て新たなつながりを形成する時期がある（桃枝,2008）ことが示されている。

また、子どもの特性によっても園での適応は異なり、対人的交流の多さといった積極性や肯定的・友好的なはたらきかけの多さが、入園1カ月後の仲間内地位を規定すること（中澤,1992）、しかしその後の適応は緩やかに進行する（古川,1995）ことが示されている。

1. 3. もうひとつの移行期：3歳から4歳への進級

幼稚園新入園の移行についてみてきたが、幼稚園の場合、3歳から4歳への進級時も移行期として目を向ける必要がある（高濱・無藤,1997）。3年保育を実施している園では、4歳児クラスは、4歳からの新入児を迎えてスタートする場合が大半である。この場合、3歳からの進級児と4歳からの新入児の2つの集団が、同じ学年に存在することになる。3年保育児、2

年保育児とクラスを分けて編成する園もあるが、新入児と進級児の混合クラスを編成する場合、この時期の適応には次の2つの側面がある（高濱・無藤,1997）。4歳新入児が3歳からの進級児にどのように適応するかという面と、3歳からの進級児が新入児にどのように適応するかという面である。

高濱・無藤（1997）は、3歳児の3月から進級後の5月までの3カ月間を対象に、進級児3名の移行期への適応を検討している。その結果、進級児は新入児の参入により、一緒に活動する相手が変わったり、活動時間が減少するなどの影響を受けていた。また、既存の仲間関係が不安定になり、いざこざが生じることもあった。こうした移行期における適応行動は対象児によって違いが見られ、その違いと対人行動の積極性の個人差との関連が示唆されている。

1. 4. 移行期の子どもを支える：保育者の役割

移行期における子どもの適応について、先行研究を概観してきた。しかし、いずれの研究においても、保育者の役割が検討されていない。子どもの適応について、保育者との人間関係の形成に着目した研究（大野,2000）はあるものの、保育者が移行期にどのようなねらいをもって環境を構成し、子どもへの援助を行ったのか、保育者に焦点をあてた研究は見られない。しかし、保育者のかかわりをぬきにして、保育の場における子どもの育ちを捉えることはできないだろう。

1. 5. 本研究の目的

そこで本研究では、移行期への適応について保育者の役割の観点から検討していくことを目的とする。具体的には、幼稚園の4歳児クラスの1学期を対象に、保育者が3歳からの進級児と4歳からの新入児をどのように受け入れていくのか、またそうした個人への支援を基盤にいかにかクラスを形成していくのか、「環境構成」と「保育者の援助」の2つの側面から捉えていく。

その際、本研究では①園の教育課程・指導計画の分析から始める。日々の保育は、園の教育課程に基づき、教育目標、年間目標、期間目標の上に、毎日の子どもの姿を見とりながら、保育者がねらいをもって環境を構成し、援助するなかで営まれる。保育者個人のねらいだけではなく、園全体の方針のなかで保育が営まれている。それゆえ、教育課程及び指導計画を踏まえた上で、②保育観察から捉えた、実際の保育実践を検討していく。またさらに本研究の結果を、本研究と同一の園を対象に同様の手法を用いて3歳児1学期の保育について検討した横山他（2011）の結果と比較する。

2. 方法

2. 1. 対象

N県内の3歳児保育を行っているN幼稚園4歳児1クラス31名（男児15名・女児16名。内、進級児は男女各6名）と担任保育者。

2. 2. 方法

教育課程及び指導計画の読みとりと、実際の保育場面の観察で得られた環境構成や援助の事例を併せ、3歳児から4歳児クラスへの移行期における保育者の環境構成と援助について、考察を加えていく。

3. 教育課程・指導計画の分析

3. 1. 教育課程と指導計画

3. 1. 1. 教育課程

N幼稚園の教育課程では、園の「教育目標」に基づいて年齢別の「年間目標」が立てられ、その下に1年を5期に分けた「期間目標」が設定されている。各期には、その期に特徴的な子どもの「発達の様相」とその期によく見られる園の「子どもの姿」が示されている。さらに、教育目標を達成するための「ねらい」、ねらいを達成させるための「内容」が各年齢、時期ごとに示されている。

3. 1. 2. 指導計画

保育の骨組みを示す全体的な計画である「教育課程」を具体化したものが「指導計画」である。保育を実施するにあたって必要な指導の計画として、「発達の様相」「ねらい」「内容」に加え、ねらいと内容を達成するために必要な「環境構成と援助のポイント」が示されている。

3. 1. 3. 分析

本研究では、主に「指導計画」における「環境構成と援助のポイント」について、移行期における保育者の役割の観点から検討した。

3. 2. 結果と考察

3. 2. 1. 教育目標

N幼稚園の教育の特色は「豊かな自然に囲まれたところもからだも育つ幼稚園」である。教育課程は、自尊心¹⁾の育ちに視点をあてて編成されており、教育目標として「生き生きとあそぶ子ども（安定）」「精いっぱいがんばる子ども（充実）」「友達といっしょにのびる子ども（共存）」の3点が掲げられている。

3. 2. 2. 年間目標

4歳児の指導目標は、教育目標に基づき Table 1 のように設定されている。

Table 1 4歳児の指導目標（N幼稚園）

生き生きとあそぶ子ども
自分から周囲のものにかかわって遊びを見つけ、一生懸命考えたり、十分に体を使ったりして存分に遊ぶことを楽しめる子どもに育てたい。
精いっぱいがんばる子ども
自分のしたい遊びにじっくり落ちて取り組ませたい。また、自分がやろうと思ったことができた時に、喜びや自信をもたせ、苦手なことや、初めてのことに對しても、がんばってやってみようとする気持ちを育てたい。
友達といっしょにのびる子ども
友達と遊ぶことが心から楽しいと思える子どもにしたい。自分の思いを素直に出して友だちと遊ぶ中で、友だちと一緒に遊べない楽しさや、ぶつかりあった時のつらさなど、多様な経験をすることによって友達の存在や友達の思いを感じとれる子どもに育てたい。

N幼稚園 2009 教育課程 p.11より引用。

3. 2. 3. 期間目標

教育目標を達成するために、保育年限である2～3年を見通し、幼児の発達していく姿をもとに各期毎に「ねらい」が設定されている。このねらいは、達成目標ではなく、その方向を示すものである。ねらいも自尊心の育ちの観点から、「安定」「充実」「共存」の3つの柱で構成されている。次ページの Table 2 に、4歳児の各期の子どもの「発達の様相」と保育の「ねらい」（期間目標）を示す。

Table 1、2にあるように、N幼稚園の4歳児においては、「自分の」「自分で」「自分から」など「自分らしさ」を発揮することが最も大きなねらいとされている。その上で「友だちとのかかわり」を深めることが目ざされている。

またI期（4～5月）においてのみ、「発達の様相」と「ねらい」が進級児と新入児で分けられている。進級児は「安定した気持ちで過ごす」、新入児は「安心して過ごす」と「安心・安定」が重視されている。そのため、新入児は「新しい場所や人」に慣れること、進級児は「新しい環境での遊び」を見つけることが目ざされている。

3. 2. 4. 内容

各期のねらい（期間目標）を達成するために、保育者が指導し、実際に子どもに身につけてもらいたいものが「内容」である。4歳児1学期（I・II期）のねらいと内容を次ページの Table 3 にまとめた。

Table 3にあるように、I期では、まず保育者に「親しみ」をもち、園に居場所を見つけることで、友達や園内の身近な人、園内環境などにも「親しみ」をもつことが目標とされている。そして「喜んで登園する」ことがねらいの1つとされている。幼稚園が子どもの生活の場として、物理的にも人的にも居心地のよい場になることが重視されている。

II期になると、I期で築いた安心・安定の上に「自己を発揮する」ことが目ざされる。自分の思いを出し、やりたいことを存分に楽しむことが目標となる。友達とのかかわりにおいては、言葉でやりとりしながら、歌ったり、動いたり、食事をとるなど、実際に友達とのかかわり、遊びや生活を楽しむことがねらいとなっている。自分らしさを発揮しながら、友達とともに過ご

Table 2 4歳児の発達の様相とねらい (N幼稚園)

期	I期(4~5月)		II期(5~7月)	III期(9~10月)	IV期(10~12月)	V期(1~3月)
発達の様相	進級児	年中組の環境に慣れ、安定した気持ちで過ごす時期	自分のやりたいことを存分に楽しむ時期	友達と一緒にいろいろな遊びや活動に意欲的に取り組む時期	自分の思いを出しながら友達とのかかわりを楽しむ時期	友達とのかかわりを深めながら自分らしさを発揮する時期
	新入児	先生や友達と親しみながら、安心して過ごす時期				
ねらい	進級児	<ul style="list-style-type: none"> 自分の好きな遊びを楽しみながら、安心感をもって過ごす 年中組の環境に慣れ、喜んで登園する 先生や友達に親しみをもち一緒に遊ぼうとする 	<ul style="list-style-type: none"> 安心して自分の思いを出して遊ぶ 幼稚園での生活に慣れ、できることは自分でする 友達とかかわって遊ぶことを楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に遊びをみつけて存分に楽しむ いろいろなことに興味をもち、身の回りの環境に自分からかわろうとする 友達と気持ちを合わせて遊ぶ楽しさを味わう 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いを存分に出して過ごす いろいろな遊びや活動に意欲的に取り組もうとする 友達と気持ちや考えを出し合いながら遊ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> 大きくなったことを喜び、充実感をもって園生活を楽しむ 自分なりの力を存分に出しながら、いろいろな遊びや活動に取り組もうとする 友達とかかわりを深めて、一緒に遊ぶことを楽しむ
	新入児	<ul style="list-style-type: none"> 自分の居場所をみつけ、安心感をもって過ごす 園生活の仕方がわかり、喜んで登園する 先生や友達に親しみをもつ 				

N幼稚園 2009 教育課程 p.12より引用。

Table 3 4歳児のねらいと内容 (I・II期) (N幼稚園)

		I期(4~5月)	II期(5~7月)
発達の様相	進級児	年中組の環境に慣れ、安定した気持ちで過ごす時期	自分のやりたいことを存分に楽しむ時期
	新入児	先生や友達と親しみながら、安心して過ごす時期	
ねらい	進級児	<ul style="list-style-type: none"> 自分の好きな遊びを楽しみながら、安心感をもって過ごす 年中組の環境に慣れ、喜んで登園する 先生や友達に親しみをもち一緒に遊ぼうとする 	<ul style="list-style-type: none"> 安心して自分の思いを出して遊ぶ 幼稚園での生活に慣れ、できることは自分でする 友達とかかわって遊ぶことを楽しむ
	新入児	<ul style="list-style-type: none"> 自分の居場所を見つけ、安心感をもって過ごす 園生活の仕方がわかり、喜んで登園する 先生や友達に親しみをもつ 	
内容	ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 先生や友達とふれあいがいろいろな遊びを楽しむ。 自分なりに安心できる好きな遊具や居心地のよい場所を見つける。 戸外で遊ぶ心地よさを味わう。 自分の気持ちをありのままに表出し、受け止めてもらうことで安心感をもつ。 登降園時の身支度、用便、手洗いなど生活に必要なことを知り、自分でしようとする。 友達と生活する中で、きまりがあることを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 十分に体を動かして遊び、解放感を味わう。 自分のしたい遊びを見つけて遊ぶ。 先生や友達と一緒に食べることを楽しむ。 遊びに必要な簡単な準備や片付けを自分でできるようにすることを学ぶ。 友達に関心をもって一緒に遊んだり生活したりすることを学ぶ。 異年齢の友達とかかわりをもち、親しみをもつ。 生活に必要な簡単なきまりを知る。 身近な生きものや草花に触れ、関心をもつ。 いろいろな遊具・用具に親しみ、それらを使って遊ぶ。 水・砂・土などを使って存分に遊ぶ。 友達と言葉を交わしながら遊ぶ。
	内容	<ul style="list-style-type: none"> 先生に親しみ、信頼の気持ちをもつ。 園内の身近な人の存在に気づき、親しみをもつ。 園内の環境を知り、少しずつ慣れ親しむ。 身近な春の草花や園内の小動物に親しむ。 身近な遊具や用具の扱いに少しずつ慣れていく。 先生に親しみをもって「おはよう」「さようなら」などのあいさつをする。 先生の話を絵本などを喜んで聞く。 先生や友達と一緒に歌ったり、動いたりすることを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> 先生や友達に自分のしたいこと、してほしいことを言葉で表現し、聞いてもらう喜びを感じる。 絵本やお話などに親しみ、想像しながら見聞かする。 先生や友達と一緒に歌ったり、動いたりすることを楽しむ。 自分なりのイメージをもって描いたり、つくったり、好きなものになって遊んだりする。

N幼稚園 2009 教育課程 p.14より引用。

す生活の場の確立が目ざされている。

3. 2. 5. 環境構成と保育者の援助

指導計画では、ねらいと内容を達成するために、各期に必要なと考えられる「環境構成」と「保育者の援助」のポイントが具体的に記されている。Table 4にI期とII期の「環境構成」と「保育者の援助」を抜粋し、内容ごとにまとめて記した。いずれも、先に示した園の3つの教育目標に対応した項目が立てられている。

以下、各項目に沿って見ていく。

(1) 環境構成

●安心感をもつ (安定) I、II期とも「遊び」と「居場所」について記載されている。I期では、進級児は3歳児クラスの仲間とのつながりを楽しみながら遊べる「拠点」を、新入児など友達とかかわって遊ぶことが難しい子どもには「一人でじっくり取り組める遊具」を準備し、それぞれが安心感を持って過ごせるように配慮されている。進級児には「人」との、新入児には「もの」とのつながりを保証しているともいえる。

一方、II期では、I期で築いた安心感を基盤に「自分なり」の思いを出し、解放的に遊びに取り組むことができる環境構成が重視されている。

●園生活に慣れる (充実) I期では「遊びのきっかけ」となる環境構成が重視されている。遊具・用具の置き方や、遊び出したくなるように遊具を出しておくなど、新しい環境でも子どもが遊びに取りかかれるような配慮が大切にされている。

●先生・友達とのかかわり (共存) II期では「誰もが入りやすいような遊びの場」として、進級児、新入児を問わず、クラスの子どもがみんななかかわれる場の設定が意図されている。

(2) 保育者の援助

●安心感をもつ (安定) I期では「保育者とかかわり」に重点が置かれている。保育者の子ども理解や信頼関係の構築が重視され、進級児、新入児を問わず、個別対応に力点が置かれている。それぞれの不安な気持ちを受け止めながら、保育者も一緒に遊び、楽しみ、子どもが園での生活を安心感をもって過ごせるような援助が求められている。

II期になると、友達とかかわりや遊びへの援助が中心に置かれる。「自分なり」の思いを十分出すことは、子ども同士のトラブルを招く。トラブルになったときの保育者の援助は、仲介者として互いのやりとりを手

Table 4 4歳児の環境構成と保育者の援助（Ⅰ・Ⅱ期）（N幼稚園）

I期（4～5月）	Ⅱ期（5～7月）
(1) 環境構成	
<p>●安心感をもって幼稚園で過ごすために</p> <p>○遊び：きっかけ作りと展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進級児の遊びの拠点：進級児が前年度からの仲間のつながりを楽しみながら遊べるように、扱いやすく遊びの拠点をくれるような遊具を用意しておく。 ・戸外遊び：天気の良い日は保育者が進んで戸外に出たり、室内の遊具を外に設定したりして、戸外の遊びの楽しさや心地よさを感じながら遊べるようにする。 <p>○居場所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人でじっくり取り組める遊具：パズル、粘土、絵本、ブロックなど一人でもじっくりと取り組める遊具も用意し、それぞれの子どもが自分の居場所を見つけながら個々の興味に応じた遊びができるようにする。 ・小動物とのかかわり：小動物とかかわることで気持ちが落ち着いたり、幼稚園に通う楽しみの1つになるよう、保育室の近くでウサギを見ることができるようしたり、一緒にえさやりをしたりできるようにする。 	<p>●安心して自分の思いを出して遊ぶために</p> <p>○遊び：きっかけづくりと展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・興味に応じた環境構成：子どもたちの興味や関心に応じた環境を用意し、自分なりの思いを出し、楽しみを感じながら遊ぶことで、満足感が得られるようにする。 ・感触遊び：土粘土や泥など、感触を楽しみながら解放的な遊びのできる素材を準備する。 ・水遊び：身近な遊び（泥んこ遊び・水まき・洗濯ごっこ）の中で水に親しんだり、夏ならではの遊び（水鉄砲・シャワー・プール遊び）を楽しむことで、気持ちを解放して存分に遊ぶ心地よさを経験できるようにする。 <p>○居場所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小動物とのかかわり：小動物などを持ってこることが多くなるので、友達と一緒に見たり触れたりできる場を設け、生き物に対する興味や関心、愛情などが自然に芽生えるようにする。
<p>●新しい環境に慣れ、喜んで登園するために</p> <p>○遊び：きっかけづくりと展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遊具・用具の置き方：遊具や用具はわかりやすく分類し、取り出しや片付けがしやすいように配置する。おもちゃ箱やロッカーなどは保育室の雰囲気、子どもの動線や遊び場の広がりなどを考慮して設定する。 ・遊具の出し方：遊びに取りかかりやすいように遊具を並べておいたり遊びかけている雰囲気をつくり、遊びだすきっかけをつくっておくが、徐々に手控えていき、子ども自らが遊びの場をつくっていくようにする。 ・自然に親しむ：身近な自然に親しみながら遊べるように、保育者や友達と一緒に身近な草花を摘んだり、タンゴムシを集めたりすることが楽しめるように小さなカゴや飼育ケースなどを用意する。 	<p>●園生活に慣れ、できることを自分でしようとするために</p> <p>○遊び：遊びのきっかけづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戸外遊び：戸外での遊びに関心をもてるように、中庭に巧技台、鉄棒などの運動用具を用意したり、マットを敷く。
<p>●先生や友達に親しみをもてるように</p>	<p>●生活習慣：着替え</p> <ul style="list-style-type: none"> ・着替えの衣服：個別のロッカーに着替えの衣服を常備させておき、衣服が汚れることを気にせず活動できるようにする。 <p>●友達とのかかわりを楽しむために</p> <p>○遊びの場の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遊びの場の設定：誰もが入りやすいような遊びの場をつくるとともに、保育者も一緒に遊ぶ中で友だち同士がかかわって遊ぶ楽しさを味わえるようにする。
(2) 保育者の援助	
<p>●安心感をもって幼稚園で過ごすために</p> <p>○保育者とのかかわり：子ども理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心情のよみとり：子どもの表情や様子から、新しい環境に慣れない不安や保護者と離れ寂しい気持ちなどをよみとる。泣いたり怒ったりしながらも思いを出している姿を認め、まるごと受け止める。 ・事前把握：個に応じた対応をするために、新学期開始までに生活調査票などを手がかりに個人を把握する。 <p>○保育者とのかかわり：信頼関係の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> ・信頼関係：少しでも早く信頼関係を結べるように、一人ひとりの子どもに声をかけスキンシップをはかったり、笑顔で楽しい雰囲気を作りながら、一緒に遊んだりする。 <p>○保育者とのかかわり：個別対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進級児への対応：進級した喜びとともに不安な気持ちも受け止める。年中組ならではの遊具や環境を保育者も一緒に楽しみながら、大きくなった喜びを感じ、自信をもてるようにする。 ・表情が硬い子どもや遊びにくい子ども：こうした子どもの気持ちをおだやかにゆったりとした気持ちで受け入れる。他の子どもの遊んでいる様子と一緒に見たり、遊びに誘ったりしながら、興味のあるような遊びや場所を子どものペースで見つけていけるようにする。 ・保護者と離れにくい子ども：保護者と十分連携し、保護者にも安心してもらいながら、その子どもに合わせて少しずつ園になじんでいけるようにする。 	<p>●安心して自分の思いを出して遊ぶために</p> <p>○友達とのかかわり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トラブル：相手の思いに気付かずトラブルになったときには、それぞれの思いを十分に聞き、言葉を補ったり、互いのやりとりを手助けする。自分の気持ちが言えた喜びを感じさせると同時に、相手にも思いがあることに気付かせる。 <p>○遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水遊び：友達や保育者と一緒に楽しく遊びながら水に慣れることを大切にし、次第に全身で水遊びが楽しめるようにする。水とのかかわり方は個人差が大きいので、無理のないように配慮する。

	<p>・イメージ（なりきり）遊び：自分なりのイメージをふくらませながら身近な物やキャラクターになりきって遊ぶ姿を受け止め、その思いを大切ににする。</p>
<p>●新しい環境に慣れ、喜んで登園するために</p> <p>○園生活の流れ・生活習慣</p> <p>・生活習慣（身支度）：登降園時の身支度や片付けなどの方法を具体的に知らせ、一人ひとりのペースや力量に合わせて援助し認め励ましながら、自分でしようとする意欲がもてるようにする。</p>	<p>●園生活に慣れ、できることを自分でしようとするために</p> <p>○園生活の流れ・生活習慣</p> <p>・着替え：衣服がぬれたり汚れたりした時には、自分で着替え、脱いだ衣服の始末もできるように声をかけたり、見守ったりする。</p> <p>・水遊び：水遊びのために着替えることで生活のリズムが変わる日もあるが、着替えることが負担にならないように、水遊びへの期待をふくらませたり、がんばって着替えている姿を認め、自分からすすんで取り組めるように励ます。</p> <p>・おはようたいそう：園生活になれてきたころに“おはようたいそう”に参加する。 保育者や友達と一緒に楽しみながら、毎日繰り返し体を動かすことで、自分からやりたいという気持ちももてるようにする。</p>
<p>○園環境・ものとのかかわり</p> <p>・園環境の把握：子どもと一緒に遊びながら園内のいろいろな場所に親しませたり、園にある楽しい場所を知らせる。</p> <p>・園の施設・身近な人：保健室や給食室など生活にかかわりの深い場所や、園内の身近な人たちとのかかわりをもつ。</p> <p>○きまり</p> <p>・遊具で遊んでいるときや、水道や便所を使うときなどの機会をとらえ、並ぶことや待つことの必要性を気づかせる。</p>	<p>○園環境・ものとのかかわり</p> <p>・遊具の扱い方：保育者が一緒に準備や片付けをしながら遊具の扱い方や片付け方を知らせる。きれいに片付いた気持ちよさを伝えたり、がんばっている子どもを認めたりすることで、いやなことや苦手なことにもすすんで取り組もうとする気持ちをもてるようにする。</p> <p>○きまり</p> <p>・順番を待ったり、並んだり、物の貸し借りをしたりするときなどの機会をとらえて、簡単なきまりや約束があることを知らせていく。</p>
<p>●先生や友達に親しみをもてるように</p> <p>○保育者への親しみ</p> <p>・保育者への親しみ：ぬいぐるみやペープサートで話しかけることで「自分の先生」として保育者に親しみをもてるようにする。</p> <p>・信頼関係：自分の思いが通じなかったり、友達ともめたりしたときの不安な気持ちを受け止め、保育者と一緒なら大丈夫と思えるようにする。</p> <p>・個別対応：手紙を配ったりシールを貼るなど、生活の中で一人ひとりと向かい合う時間を大切にす。</p> <p>登降園時には保育者の方から一人ひとりに親しみの気持ちをこめてにこやかにあいさつすることで、子どもたちもあいさつする心地よさを感じ、親しみをもってあいさつができるようにする。</p>	<p>●友達とのかかわりを楽しむために</p> <p>○友達への親しみ</p> <p>・進級児と新入園児をつなぐ：進級児の遊びを大切にしながら、きっかけを見つけて新入園児を誘って仲間入りし、いろいろな友達とかかわりがもてるようにする。</p> <p>「いれて」「かして」など、かかわりのきっかけとなるような言葉ややりとりの必要性を知らせ、かかわりがもてるようにするとともに、仲間入りができたとときの嬉しい気持ちを味わえるようにする。</p> <p>・友達とのかかわり：誰もが入りやすい遊びの場をつくるとともに、保育者も一緒に遊ぶ中で友達同士がかかわって遊ぶ楽しさを味わえるようにする。</p> <p>・気持ちを伝える：自分の思いを出して遊んでいる姿に共感するとともに、保育者が仲介することで、一緒にいる気持ちが伝わって遊ぶ楽しさが感じられるようにする。</p>
<p>○クラスへの親しみ</p> <p>・クラス集団への親しみ：クラスのみんと歌を歌ったり絵本を見たりおやつを食べたりする時間をおだやかに楽しいひとときとなるように心がける。</p>	<p>○遊び</p> <p>・リズム遊び：プール遊びの前などみんなで集まったときにダンスや踊りをする機会をつくり、保育者や友達と一緒にリズムに合わせて体を動かすことを楽しめるようにする。</p>

N幼稚園 2009 教育課程 pp.39-44 より作成。

助けし、相手の思いに気付かせることにある。自分らしくありながら、友達とつながる援助が求められる。

●園生活に慣れる（充実）Ⅰ期では、園での基本的な生活習慣（身支度）の習得と園環境や園内の身近な人の把握のための援助が中心に置かれている。Ⅱ期になると「自分でする」ための援助が中心となる。

生活習慣では、夏の時期ならではの水遊びに関して、子ども自らが取り組むための援助が求められている。園環境・ものとのかかわりでは、まず遊具の具体的な扱い方や準備、片付け方の援助に中心が置かれている。またⅠ、Ⅱ期に共通して、機会を捉えて、集団生活で

ある園生活に必要なきまりに気づかせ、知らせる援助が求められている。

●先生・友達とのかかわり（共存）Ⅰ期は「保育者」に親しみを持ち、信頼関係を築くための援助が中心である。ぬいぐるみやペープサートを用いた保育や個別対応の重視など、具体的に1人ひとりの子どもへのかかわり方が示されている。友達に対しては、興味をもったり、お互いを知るための援助が求められ、クラス集団に対しても、一緒に過ごす時間が楽しいひとときとなるような配慮が求められている。

Ⅱ期では「友達」に親しみを持つための援助が中心

となる。進級児と新入児をつないだり、気持ちを伝え合いながら、友達とのかかわりを広げる援助が重視されている。I期で築いた保育者との信頼関係を基盤に、保育者が子ども同士をつなぎながら、友達関係をクラス全体に広げていくような援助が求められている。

4. 保育場面の分析

4. 1. 観察方法

2011年4月～7月の期間中、第1著者による登園から降園時までの観察を、週1回（水曜日）、計12回行った。記録は、フィールド・ノートに記録すると共に、写真を撮影した。また保育終了後、随時担任保育者と意見交換すると共に、1学期終了時には4歳児の環境構成、援助についてインタビューを行った。

4. 2. 結果と考察

観察結果に、「環境構成」と「保育者の援助」の2つの観点から考察を加えていく。なお、本文中の事例の子どもの名前は全て仮名である。

4. 2. 1. 環境構成

室内環境を Figure 1 に示した。

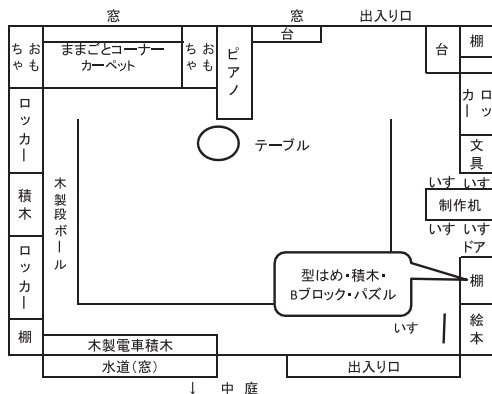


Figure 1 4歳児の保育室（4月13日）

●居場所の確保

3歳児同様（横山他,2010）、くつばこ、ロッカー、床に1人ひとりのマークが貼られ、自分の場所が一目で分かるようになっていた。このようにマークで自分の場所が明示されることは、子どもにとって自分の居場所の確保につながる。

絵本棚の壁面には、「おたんじょうび おめでとう」の文字と車が貼られていた。1月ごとの車両には、誕生日を迎える子どもの名前と日付が書かれており、その人数だけ、マークが貼られたウサギが乗っていた。誕生日を祝ってもらうだけでなく、自分がこのクラスの1員であること、そしてクラスの友だち全員を視覚的に捉えることができる掲示となっていた。

遊具は、指導計画にもあったように、1人でじっくり取り組めるものが数多く置かれていた。絵本の他、

型はめ、パズル、小型積木、Bブロックなどがあつた。それらが置かれた棚の上には、めだか（4/13～）、カタツムリ（4/27～）などの飼育ケースがあり、子どもが自宅から持参した生き物や草花が置かれていた。

●遊びのきっかけづくり

遊具（ままごとの道具・パズルなど）や用具（文具など）を置く場所には、絵とともにひらがなが書かれたラベルが貼られ、取り出しやすく片付けやすいように整理されていた。また、遊びを誘発するように、遊具が置かれていることもあつた。

【事例1】積木が遊びを誘う：4月13日（入園式）

保育室のロッカー寄りに、段ボールの大型積木と木製の積木が数個並べられている。また、木製の電車の陸橋も置かれている。一番最初に登園してきた進級児のみゆがそれを見つけ、「あれー、なんで、いつもとちがうの？」と保育者に尋ねる。「今日はね、入園式やろ。はじめて来るお友達のためやねん。新しいお友達来たら、これ難しいかもしれんやろ。もしかして、新しいお友達、できないかもしれんから、先生、出しといたん。」と説明する。

入園式の日、新入児が遊びに取りかかりやすいように、積木が出されていた。そして、積木で遊び始めたのは、進級児のしんじだった。

【事例2】重たくないよ：4月13日（入園式）

しんじが、朝の身支度を終え、積み上げてある木製積木を床におろし始める。「しよるか？好きな作っていいよ。してみようか」と保育者。「重いやろ。ももぐみのときの積木より重いなあ」と保育者が言うと、「ももぐみの積木より重くない」としんじ。そう言いながら、床に積木を並べていく。「つなげてくれるの。あー、つながった、つながった」と保育者。

進級児にとっても4歳児の保育室は新しい環境である。段ボール製の大型積木は3歳児クラスにもあつたが、木製積木は4歳で初めて出会う遊具である。木製積木の方が重く、実際重そうに運んでいたしんじであったが、重いことを言葉では認めていない。うれしそうに次々と積木を床に並べるしんじには、進級して大きくなったという自負が感じられた。

●遊びの場の設定

保育室のまんなか遊びの場を設定し、保育者が子どもたちと一緒に遊ぶ姿も見られた（5/11粘土、6/1製作：おたまじゃくし、6/22製作：七夕飾り、7/6オタマジャクシの水槽）。

【事例3】みんなでパンや：5月11日

保育室のまんなかで粘土遊びをしている。床に大きな粘土板を広げ、粘土が入ったカゴを囲んで、進級児のこうた、れいじと一緒に、保育者が『おいしいパンやさん』の絵本を開いている。「うわーおいしそう、どこ開いとく？こうたくん、どこのページにしとく？」登園してきた進級児のみゆ、新入児のゆかり、あきも寄ってくる。身支度を終えたあきに、保育者は「あきちゃん、何したい？昨日の続きしてる人（てるてるぼうず作り）もいるし、こっちはパン屋さん。いいにおいしてきたやろ。先生、何パンにしよるかな」と言う。

保育者が遊びの中心にいと、進級児、新入児を問わず、子どもたちが集まってくる。絵本を見ながら好きなパンを作る遊びは、子どもたちにとって魅力的であり、誰もが遊びに入りやすい場の設定となっていた。

また事例4のように、保育者が遊びの場を設定するだけではなく、子どもから生まれた遊びを、保育者が発展させていくこともあった。

【事例4】あまみずぼったんおたまじゃくし：6月1日

雨降りの日、保育室のまんなかの机を囲んで、進級児のみゆ、りな、新入児のゆかり、あき、こうじら5,6人の子どもと保育者がおたまじゃくしの形が描かれた紙を切り抜き、水性ペンで模様をかいている。おたまじゃくしをもって部屋の外に走り出たみゆは、たまたま雨の水滴がおたまじゃくしに落ち、色にがじむのを発見した。「うわー、きれーい。ぬらしたら、おもしろい！」と部屋に戻り「もう1個する」とおたまじゃくしを持って、軒先に出る。それを見た他の子どもたちも集まってきて、おたまじゃくしを作り、軒先に向かう。保育者は、廊下から軒先にすのこを敷き、雨粒を受けるための道をつくる。と同時に、大きめのトレイに水色のビニール袋を敷き、池を作る。順番にすのこの道を通って、おたまじゃくしに雨の水滴を落とした子どもたちは、自分のおたまじゃくしを、うれしそうにビニールの池に泳がせた。

このように、環境は「もの」だけではなく、保育者自身が子どものなかに入って一緒に遊ぶことで、子どもを遊びに誘うことが多く見られた。

4. 2. 2. 保育者の援助

●1人ひとりとながら

保育者は子ども1人ひとりとの個別のかかわりを重視していた。特に4月は、登園時、事例5のように、スキンシップを大切にしていた。

【事例5】おはようだっこ：4月20日

登園時、保育者は保育室内にいて、子どもたちが部屋に入ってくると1人ずつ「おはよう」と声をかける。「門の所で、お母さんとバイバイしてきた？ だったらおはようだっこ」と言って1人ずつ抱きかかえ、だっこでぐるぐるすると回る。

また、事例2のしんじのように、一緒に遊びながら、進級児には4歳児クラスならではの遊具で遊べることに着目した声かけをし、成長が感じられるような援助を行っていた。

●子どもと子どもをつなぐ

保育者は自分と子どもの関係を結ぶだけではなく、子ども同士をつなぐ援助も多く行っていた。

【事例6】友達が待ってたよ：5月11日

朝の登園時、保育室に入ってくる子どもたちに、保育者は1人ひとり、声をかけていく。前日はなかなか母親から離れず泣いていた新入児のゆうじには「おはよう、ゆうじくん。今日にはここにこやね。うれしいね」。連日何かしら昆虫などを持ってくる進級児のりくには「おはよう、りくくん。今日は？」と尋ね、新入児のみくには「みくちゃん、おはよう。さきな（進級児）ちゃん、待っててくれたたで。」と声をかける。

5月に入った事例6では、登園時、スキンシップではなく、1人ひとりに内容の異なる個別のことばかけ

をしている。そのなかで、新入児のみくには、友達（さきな）が登園を待っていたことを伝えている。

【事例7】友達とつなぐ：6月22日

進級児のらいたがひとりで電車の積木で遊んでいる。陸橋を渡し、踏切をつくり、ぐるりと線路を敷いて、電車を走らせている。そこに、新入児のこうじが来て、らいたが敷いた線路の上に電車の積木を走らせる。2人は特に言葉を交わすわけでもなく、それぞれが電車を走らせている。保育者がその様子を見て、「こうじくん、この子、らいたくん、って言うねんで。全部、これらいたくんが1人で作りはったんやって。すごいなあ」とこうじに伝える。らいたは、保育者の方を見て、にっこり笑う。

事例7は、言葉なく、同じ遊びをする進級児と新入児の2人を保育者が言葉でつないでいる。こうじには、友達の名前を告げ、どのようにこの遊びが展開してきたかを説明している。らいたに対しては、保育者はらいたのことは見ており、認めているということ伝えるために、こうした言葉かけをしたとのことだった。

また、事例8のように、子ども同士がお互いを理解できるように、相手の気持ちを伝えたり、自分の気持ちを伝えるためには、どのように表現すればよいのか、子どもに知らせる援助もよく見られた。

【事例8】気持ちを伝える：6月1日

電車の積木で遊んでいる進級児しんじに、新入児のそうたが突然後からだきつく。びっくりしたしんじは泣き出す。そうたもびっくりして、しんじから離れる。保育者が2人に駆け寄り、「しんちゃん、嫌やな」としんじに声をかける。「そうちゃん、しんちゃんの顔見て。嫌やんな。先生やったら大きいから大丈夫だけど、お友だちはしんどいねんな。」とそうたの顔を見ながらに伝える。「しんちゃん、嫌やったら、嫌って言おうな。そうちゃんは、好きな人がいたら後からぎゅーってするねんで」としんじに言う。

その他にも、子ども同士の思いがすれ違った場合は、仲介者として子どもの間に腰を落として入り、それぞれの思いを聴き取る保育者の姿がしばしば見られた。簡単にすれ違いをいさめることを目的とするのではなく、子ども双方の思いを十分に引き出すことを重視した援助を行っていた。

4. 2. 3. 子ども同士のつながり

観察では保育者の援助を見てきたが、子どもたちは、保育者の援助のないところでも、互いにかかわりあう姿が見られた。

●「もの」を介してつなぐ

【事例9】お互いの存在を感じながら：5月25日

登園してきた保育室で。ロッカーの上の壁面に貼られた「おかあさんのかお」の絵を進級児のなつみが見ている。そこに新入児のゆかりが母親と登園してくる。ゆかりは、なつみのそばに行き、なつみが見ている絵の方を見る。「わたしのあった！」となつみが自分の絵を指すと、ゆかりも指された絵を見る。その後、ゆかりは絵を見渡し、自分の絵を見つけて「おかあさん、見て、あれ、おかあさんの絵かいた」とうれしそうに指さす。それを見たなつみは「ないしょなのに」とつぶやく。

事例9では、2人は直接言葉を交わしたり、視線を合わせたりはしていない。それでも、お互いを意識していることがよみ取れる。後から登園してきたゆかり

はなつみの視線に自分の視線を重ね、同じ絵を見ている。一方のなつみは、近寄ってきたゆかりの存在を意識し、自分の絵を見つけたときには絵を指さし「わたしのあった！」と声を上げている。壁の絵は、母親には内緒のプレゼントだった。それを忘れたゆかりをなつみは非難する。ただし、ゆかりには聞こえないようにつぶやいている。ここでは、2人は直接向き合うのではなく、「もの」(絵)を介して、互いを意識し合い、かかわりあっていることがわかる。

無藤(1997)は、相互作用の始まりには「共通の対象への注意の成立」(p.103)が重要であり、子どもには物を媒介としたやりとりが多いことを指摘している。本研究でも「もの」を介して子ども同士がつながる事例が多く見られた。

【事例10】 今日もいっしょ：6月22日

登園後、朝の身支度を終えた新入児のみく。新入児のさやかのそばに行き、「さやかちゃん、いっしょにあそぼ」と声をかける。さやかは振り向き、みくの頭を見て「今日もいっしょ、リボン！」とうれしそうに言う。みくは頭に手をあて、にっこり笑う。2人は「ふふっ」と笑いあい、手をつないで外へ出た。

【事例11】 ものでつながる：7月6日

水遊びの準備をしている。プールバックからタオルを出した進級児のこうたは、新入児のこうじが同じ柄のタオルを持っているのに気付く。こうたは、こうじのそばに行き、「いっしょや」とうれしそうにタオルを見せる。こうじもこうたのタオルを見て、「いっしょや」とニコニコしながら繰り返す。2人は床にタオルを広げ、座り込んで見比べ始める。その様子を進級児のれいじも2人のそばに座って見ている。

同じものを所有していることは、子どもにとって、互いの距離を一気に縮め、親近感を高めるのだろう。

事例10のみくとさやかは、5月の観察(5/15)でも、2人で一緒に遊ぶ姿が見られている。このときは、ままごと用の同じエプロンを2人でつけていた。ままごと用のエプロンやスカートは女兒に人気があり、他の新入児の女兒2人も同じエプロンをつけて、ごっこ遊びをしたり、絵本を読んでいた(6/1)。

●つながりの壁

1学期の子ども同士のつながりをみると、安定した仲の良い友だちペアは、進級児同士(らいた・しんじ、なつみ・りな)、新入児同士(みく・さやか)の組み合わせが多かった。中には、隣の4歳児クラスから3歳のときの友だちと遊ぶために、ほぼ毎日、やってくる進級児の女兒もいた。登園時に泣いていたたり、なかなか友だちと遊べない進級児の女兒もいた。進級児、新入児の壁をこえて結びつきの強い友だち関係を築くには、1学期の4カ月だけでは短いことがうかがえた。

5. 総合的考察：移行期における保育者の役割

5. 1. 4歳児クラスへの移行期の特徴

N幼稚園の教育課程・指導計画、及び観察結果から、4歳児1学期の移行期の保育者の役割を見てきた。

ここではまず、進級児と新入児が混在する4歳児への移行期の特徴を、3歳入園の1学期(横山他,2011)と比較しながら、検討していく。

3歳児1学期では、保育者は園生活を安心して過ごせるように環境を構成し、マークで子どもの所有や場所を明示するなど「居場所の確保」に工夫を重ねていた。また、1人ひとりの子どもに個別に対応するなかで「保育者」が園での拠り所となるよう、信頼関係を築く援助が重視されていた(横山他,2011)。

本研究の4歳児1学期では、「居場所を確保」した上で、「遊び」のきっかけをつくったり、場を設定する環境構成が目ざされ、「保育者が子どもとつながり」ながら、「友達とつなぐ」援助が重視されていた。

先述の福田ら(1980)の4歳児を対象とした移行期の研究では、物理的環境や基本的な生活習慣への適応は早いのが、対人的環境面への適応は時間を要していた。こうした研究結果と併せみると、4歳児クラスへの移行期の保育者の役割の特徴は、「居場所を確保」した上で、「遊び」を通して「心理的居場所」ともいえる「友達」との関係を築いていくこと、といえる。

その際、新入児には「もの」(1人でじっくり遊べる遊具・場)とのつながりを保証するなど、より「居場所の確保」に重点が置かれ、進級児には「人」(3歳児クラスの友達)との関係を基盤に「友達」(新入児)関係を広げていくことが重視されていた。

5. 2. 子どもをつなぐための保育者の援助

では「遊び」を通して、「友達」関係を築いていく保育者の援助とは、具体的にどのようなものなのだろうか。

まず「環境構成」として、遊びが生まれやすい遊具や用具の配置、遊具の出し方の工夫が挙げられる(事例1,3)。次に「保育者の援助」として、保育者自身が遊びのなかに入り、言葉で子ども同士をつないだり(事例6,7)、かかわりのための具体的なやりとりを言語化し、伝える(事例8)ことが指摘できる。このように、保育者は子どもたちのなかに入って、一緒に遊びながら、言葉を用いて子ども同士をつないでいる。

5. 3. なめらかな移行のために：移行期とはいつまでか？

ところで、そもそも4歳児クラスへの移行期とは、いつ頃までなのだろうか。N幼稚園の教育課程・指導計画では、進級児と新入児を別個に取り上げているのは、1期(4~5月)の2カ月のみである。

しかし、移行期をどう捉えるかで、終わりの時期の捉え方も異なってくるだろう。N 幼稚園の教育課程においても、4 歳児Ⅱ期（5～7月）の「子どもの姿」の欄には「進級児」「新入児」の記載が見られる (p.43)。

福田ら（1980）の結果にあったように、物理的環境と基本的生活習慣、対人的環境では、適応の時期が異なる。また、子ども 1 人ひとりの適応だけではなく、クラス単位で、進級児と新入児が「つながりの壁」を超え、混じり合い、1つのクラスにまとまっていくことまでを目ざせば、さらに長い期間を要するだろう。

5. 4. まとめと今後の展望

本研究では、保育者の役割の観点から、子どもの環境移行期を捉えることを目指した。教育課程・指導計画を踏まえた保育場面の分析から、幼稚園という「集団生活」への適応について、移行期という観点から保育者の役割を問うた。その結果、3歳新入園時ではいわば「集団生活」の「生活」により比重が置かれた援助が、4歳では「集団」に重点が置かれた援助がなされていた。

また、保育場面の観察から捉えた子どもの姿には、保育者のねらいとは別に、子ども自身が「もの」を介して「人」とかかわり、関係を広げていく様子が見られた。保育の場は、子ども自らがもつ意欲と育ちの力と、保育者のねらいと援助が織り合うことで、子どもが成長・発達していく場である。教育課程・指導計画の分析と保育観察を併せた本研究の手法は、両者を捉えることを可能にする有効な手段といえよう。

今後は、4歳の子どもたちが、進級・新入の壁をこえ、どのように友達関係を広げ、移行の壁を乗り越えていくのか、年間を通した分析を行っていきたい。

引用文献

- 福田 廣 1992 家から幼稚園への移行 山本多喜司・ワップナー, S. (編著)「人生移行の発達心理学」, 北大路書房, 137-151.
- 福田 廣・藤原武弘・古川雅文 1980 幼児の環境適応に関する微視的発生的研究, 山口大学教育学部研究論叢, 30, 1-10.
- 古川雅文 1995 学校環境への移行 内田伸子・南博文 (編)「講座生涯発達心理学3 子ども時代を生きる」, 金子書房, 27-59.
- 今井麻美 2006 家庭から幼稚園への移行期における子どもを持つ母親の心理的变化, 乳幼児教育学研究, 15, 97-106.
- 松井愛奈・無藤 隆・門山 睦 2001 幼児の仲間との相互作用のきっかけ: 幼稚園における自由遊び場面の検討, 発達心理学研究, 12, 195-205
- 無藤 隆 1997 「協同するからだ」とことば: 幼児の相

互交渉の質的分析」金子書房

- 桃枝智子 2008 幼稚園に入園した子どもの「つながり」のはじまり: 他者関係の生成と変容過程 人間文化創成科学論叢 (お茶の水女子大学), 11, 379-388.
- 中澤 潤 1992 新入園児の友人形成: 初期相互作用行動, 社会的認知能力と人気, 保育学研究, 30, 98-106.
- 岡本依子・菅野幸恵・塚田-城みちる 2004 「エピソードで学ぶ乳幼児の発達心理学: 関係のなかで育つ子どもたち」新曜社
- 大野圭子 2000 4歳児の幼児と保育者との人間関係の形成について: 一学期の新入園児Ⅰ子と進級児Ⅱ子の事例を通して, 日本保育学会大会研究論文集, 53, 86-87.
- 謝 文慧 1999 新入幼稚園児の友だち関係の形成, 発達心理学研究, 10, 199-208.
- 高濱裕子・無藤 隆 1997 移行期の仲間関係: 新入園児の参入にともなう進級児の相互作用の変化 日本家政学会誌, 48(4), 279-287.
- 横山真貴子・竹内範子・上野由利子・掘越紀香 2011 新たな幼児教育の創出に向けて、幼稚園教育の成果を問う試み: 幼稚園の3歳児保育の内容に着目して 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 20, 327-335.

参考 URL

- 文部科学省 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議報告書について www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/070/houkoku/1298925.htm

注1) 自尊心

かけがえのない自分を大切に思う心。自分の弱いところやいやなところも含めて、自分を丸ごと肯定する気持ちであり、自分の存在そのものを価値ある者と認める心。そしてその心は人のことも同じように大切に思う気持ちにつながる。